

## ○タヂカラ（手力男命）ノート（01）

垣澤社中さん（神奈川県厚木市酒井）が伝えている神楽演目「天之磐扉（岩戸開き）」。デジタルオーディエンスの皆さん、この動画をご覧になっていかがでしたか。私は、この動画を見てから、家元（垣澤勉さん）にタヂカラ（手力男命）役について、あらためて、伺いましたのでご一読ください。ともすれば、神楽公演を企画する側は、公演後は次の作業ステップがあって、神楽公演を振り返る時間は案外少ないものです。私は、公演後に演じ手側（つまり出演された神楽師さん）と接触して、公演プログラムの執筆のときに、扱わなかったテーマ、扱えなかったテーマを後追いで記述していきたい、と考えています。

公演動画の価値化、再価値化を図ろうという思いになりました。

＊

**斉藤修平（以下、斉藤）**：タヂカラの初舞台は、何歳の時でしたか。

**垣澤勉さん**：私が社中に加わり5年目あたりの32歳ごろだったと思います。先代（常蔵）から少し稽古をつけてもらい無理やりやらされた感じでした。早く、自分の後継者を育てたかったからだと思います。

**斉藤**：奉納した神社、どこの神社でしたか。

**垣澤勉さん**：初舞台の神社は余り覚えていません。恐らく岩戸開きをやるのですから、神社にとって記念となる祭礼だったと思われます。神楽師も多く集めていたため、演目もイザナギの身褌払いから三筒男、そして三番叟から五人囃子までの通しで神楽を進めたと思います。

当時は、東京（江戸）から囃し方が助っ人に来ていましたので緊張していたことは覚えています。上手く演じられたかは全く覚えていません。実は、上手く演じられなかったのが記憶を消去したかもしませんがね。その後、あまり間を置かないでタヂカラ役を任されたので大きなミス？はなかったのかと思います。あるいは、先代から再テストだったのかもしれないですね。

**斉藤**：私などは、タヂカラ役というのは、「特別な芸」という思いがあるのですが。

**垣澤勉さん**：タヂカラ役は、特別な役どころだとは思いますが、家元の芸、家元の役とは全く思いません。ある一定の演技力と舞台経験がなければこの役は与えられませんが、家元以外の神楽師にもタヂカラ役が与えられていました。現在、垣澤社中では娘の瑞貴（四代目）にもタヂカラ役をやらせてもらっています。恐らく、女性のタヂカラ役者はいないのかも知れないですが、

どんどん挑戦して行って頂きたいです。先代は、実際にその役を体験させ、役の奥深さ、演技に臨む心構えなど、稽古では伝えられないものを会得して頂きたいと思ったのだと考えますし、私も同じ考えです。

しかし、神楽師として一生タヂカラ役に付けない方も沢山いますので特別な役であることは確かです。一方、囃し方もそれなりの技量がなければこの舞台を任せることもできないのも事実です。

**齊 藤：**そもそも、岩戸開きといいますか、「天之磐扉」そのものが、まず神楽見物に出向いても見る事ができないですね。つまり見学側にとっても大がかりな神楽ですから、貴重な神楽だと思っています。岩戸開きは、家元が神楽をやり始めた頃ですが、どの位のペースで披露されていたのですか。

**垣澤勉さん：**私が神楽をやり始めた頃は、神社の御遷宮など、特別な場合のみに限られていました。それも、山本社中、亀山社中に出方として関わっていましたが数年に一度ぐらいしか経験出来なかった貴重な神楽でした。神楽師の人数と技量、舞台の大きさ、荷物の搬入等のことを考えると公演は困難であったのだと思います。

近年は神社での祭礼公演が激減しました。従って、神楽師の演技力低下を防ぐためと里神楽の普及のため特別な日に限らず神社の奉納公演、そして劇場で行う依頼公演でも上演するように努めています。貴重な神楽の意味合い、それが薄れ残念ですが時代の流れで仕方がないです。

**齊 藤：**岩戸は、やはり特別な神楽演目。それが、いつの間にか、「ハレ」の演目、特別な演目だという意識が失われてきた、ということですね。

**垣澤勉さん：**岩戸開きは、神社の拝殿、神楽殿の柿落とし、神社の附帯設備の新築披露など目出度い催しがあった時にしか出さない特別な演目でした。氏子の方々が沢山の寄付金を集め、数十年、いや数百年以上を経過した神社の建て直しや補修をするわけです。それなりの気持ちの入れ方が違います。その中で祭礼に神楽を奉納しようとするのですから、神楽の依頼を受ける側もその気持ちに応えたい。その意味では神楽十八番と言われる岩戸開きは内容的にも縁起が良く特別な意味を持つ演目と思っています。近年は本来の神社祭礼での記念すべき公演機会がなくなってしまったため、残念ながら特別な思いが薄れています。

**齊 藤：**これは「里神楽の現在」を学ぶ上で重要なコメントですね。ところで、先代の、あるいは昔の方で、見事だったタヂカラ役者はどなたですか。

**垣澤勉さん**：他の社中のタヂカラ役者を余り拝見していなかったもので、何とも言えないです。その中で、身内のことを言うのは申し訳ないですが、見事だったタヂカラ役者は、先代の家元（常蔵）です。先代は160センチほどで背も低く、身体も小柄でタヂカラ役者としては向いていませんでした。しかし、身体を大きく見せる工夫や、気持ちの部分での激しさ、力強さ、優しさなどを含め、その表現力と華麗な演技力は見事でした。番田神楽の亀山時恵さん（家元）に解説をお願いしている時は、私は舞い方と囃子方でしたので、時々ですが、父の演技を観たり囃子を聴いたりする機会がありました。厚木文化会館大ホールの落成記念公演では私が笛を吹き、父がタヂカラを舞った姿は、今でも忘れません。もっともっと指導も受けていたらと、今でも悔やんでいます。

**斉藤**：岩戸という演目、いろいろな役者（神々）が登場します。バランスが難しそうですね。そこで、家元から見て、ウズメ、アマテラス、フトダマ、それから、オモイガネの役割についてのお考えを教えてください。

**垣澤勉さん**：「神楽」の語源となったと言われるウズメの舞がある訳です。その意味ではウズメは重要な位置づけです。特に女神が舞いますので、舞台の雰囲気が一変します。そこに、全く違ったキャラクターのタヂカラが登場します。タヂカラが腕力を発揮し、問題（岩戸）を解決（取り除き）し、太陽の神アマテラスをこの世にお招きし、再びもとの平和な明るい世の中になったというお話です。それぞれの神が重要な役割を担う役となっています。オモイガネ（思兼命）ですが、現代でいうと内閣総理大臣にあたる神様です。八百万神（国会議員）を天の安河原（国会議事堂）に集め、この世の中を平和な明るい世の中にしようと知恵を絞り、懸命に働いている物語に現代の世の中にも通じるものがあり共感を覚えます。現在は女性議員（ウズメ）が沢山いますが、もっともっと活躍し、ゆくゆくは女性の内閣総理大臣（オモイガネ）が出てもらいたいものです。

**斉藤**：なるほど、わかりやすいご説明ですね。ところで、岩戸の難しさ、そして、気持ち良さ、そのあたりもお聞かせください。

**垣澤勉さん**：この演目は、連れ舞いや立ち回りなど神楽師同士が互いに絡む場面がないため、囃し方を含め、それぞれの役をしっかりとこなせば演技の流れの難しさは特にありません。但し、各役どころが難しいため満足できる公演は殆どありません。その中で大きな舞台を無事に終えた、そのような達成感は生まれます。ですが演目の重さや芸の奥深さを考えると気持ち良さはあまりありま

せんでした。

**斉藤**：そうですか。観客側である私は、きっと演じている方は気持ちがいいんだらうな、と想像していました。岩戸開き、特別な演出があるのですか。

**垣澤勉さん**：演出の種類は殆どありません。八百万神の数の増減しかありません。相模では最低でもアマテラス、オモイガネ、ウズメ、コヤネ、フトダマ、タヂカラを登場させ、解説やお囃子方を含めると10人以上は必要となってきます。更に、イシコリドメ、タマノオヤを登場させる場合がありますが舞台の広さや出演謝礼額にもよります。

**斉藤**：確かに、大きな神楽。神楽師を集めるために社中の家元が神楽師さんに支払う費用も大きいですから、そのことはよく理解できます。私は、相模の神楽を見学しながら、やっぱり舞台が大きくないと岩戸開きの魅力は伝わらないなど、思いました。舞台の広さと神楽演目の関係です。

**垣澤勉さん**：物語の場面が天の安河原という広い場所です。そして、多くの神々と評議する場面ですので、狭い場所よりは広い神楽殿の方が雰囲気を出せます。また、相模の場合は、歌舞伎仕立ての花道付の大きな舞台が多いので、登場する神様が少ないと迫力に欠けてしまいます。従って、演者はかなり身体を消耗し真冬の舞台でもかなり汗をかきます。

**斉藤**：それにしても、タヂカラはなかなか登場しない、なかなか引っ込まない。その様子が楽しいなと思っています。

**垣澤勉さん**：タヂカラが花道の面幕（楽屋と花道の境に垂れる幕）から現れ、最初の所作（面幕の見得）で、その人の力量が分かると言われていています。そして、本舞台に中々入ってきません。これも役どころで芸の重みを表現する所作の一つです。プーチン大統領がよく使う手です。（笑い）引っ込みの演技も同様です。中々舞台から引っ込みません。見ている人にその手柄を執拗に訴えて帰ります。実は、その時、楽屋裏では既に引っ込んで来た沢山の役者さんの衣裳の片付けでてんでこ舞い。その時間稼ぎもある訳で、演技力のないタヂカラ役者は困る場合があります。

さいたま芸術劇場では、アドリブでステージから降り観客席からロビーまで歩きお見送りさせて頂きました。これも劇場ならではの出来たパフォーマンスです。沢山のお客様と直に接し、握手や記念写真を撮ったりしてしまいましたが、皆さん大変喜んで頂けたので、私も楽しく、やって良かったと思っています。

（文責・構成 斉藤修平）